

中南林学院を訪ねて

大 隅 眞 一*

1987年5月8日から6月7日まで1ヶ月の間、私は妻を伴って中国を訪れた。この訪中は中国林業部の招請によるものであるが、推薦してくださったのは北京林業大学の森林経理学副教授・于政中氏であった。同氏は1986年4月に中国林業視察団の一員として来日、京都に立ち寄られたが、その際訪中の希望を伝えておいたところ、実現に努力して下さったのであった。訪中の目的は中南林学院と北京林業大学において講義をすることであったが、同時に未知の中国について少しでもその実情を知りたいというのが私達の願望でもあった。

5月8日空路上海に着いた私達は、25時間列車に揺られた後、9日夕方湖南省株州市に着き、郊外にある中南林学院のキャンパスに入った。そして5月31日北京に発つまでの3週間で過ごした。最初の2週間は、月曜日から金曜日まで午前中は講義、午後は自由時間で時々株州の街へ案内してもらった。第1週の土曜日には、株州から北へ60キロの距離にある湖南省の省都・長沙に遊び、日曜日には韶山にある毛沢東の生家を訪れた。第2週の土曜日から第3週にかけては、講義の終わったあとの休養を兼ね、湖南省の西北部にある張家界国家森林公园へ案内された。再び中南林学院に戻った私達は5月31日正午頃列車で株州を発ち、翌6月1日正午過ぎようやく北京に到着した。北京では6月7日まで北京林業大学構内の宿舎に滞在し、その間午前中は講義、午後は北京市内及び近郊の観光に案内された。そして6月7日朝空路北京を発ち、上海を経て帰国したのであった。

今度の訪中旅行は、全く初めての国であっただけに、戸惑いを感じ、困ったことも再三ではなかったが、それだけに見聞するもの全てが珍しく、新鮮な体験の連続であった。とくに長閑な田園のなかで、滞在の長かった中南林学院での生活は、私達にとって忘れ得ないものである。直接お世話下さった測樹学教研室主任・成子純教授、上海から北京まで、私達の滞在のあいだ殆ど毎日お世話をして下さった庄昌盛講師、若くて感じの良い、素晴らしい日本語を話す通訳の王章才君、さらに18の省からやってきたという聴講生の諸君との交流など、暖かい思い出ばかりである。以下、中南林学院の紹介とそこでの生活の印象を書いてみたい。

招待して頂いた中国林業部ならびに滞在中お世話になった中国の方々へ心から感謝致します。

1. 中南林学院

中南林学院は林業部主管(国立)の林業専門の高等教育機関の一つである。株州市の中心から車

*京都府立大学名誉教授

で約 20 分、田園に囲まれた小高い丘の上にある。

中国には林業部主管の林業専門の高等教育機関が 6 つある：北京林業大学 (北京市)，南京林学院 (江蘇省南京市)，東北林学院 (黒竜江省ハルビン市)，中南林学院 (湖南省株洲市)，西南林学院 (雲南省昆明市)，西北林学院 (陝西省咸陽市)。この外に省や自治区主管の林業専門の高等教育機関が 5 校，さらに農業大学に設置されている林学系に属するものが 18 校ある (当代中国的林業，中国社会科学出版社，1985，北京)。中心はやはり北京林業大学を初めとする国立 6 校なのであろう。

中南林学院は 1963 年，湖南林学院と広東林学院とが合併してできたもので，初めは広州市におかれていたが，1980 年に南方交通の要衝であるこの株洲市に移転されたものである。1987 年の学生募集用ポスターから，通訳の王章才君の訳出によって，中南林学院の教育組織の概要をあげておこう。

「学院には 4 つの系と 2 つの部がおかれている。すなわち林学系，経済林系，林業機械系，林産工業系，ならびに基礎科学部および師範部である。これらは表に示すように，合計 13 の専門に分かれている。

林学專業：林業における生産，管理及び林学の研究と教育に携わる高級技術者の養成を目的とする。

森林保護專業：森林保護の分野に関する高級技術者を養成することを目的として，森林病虫害や森林火災の発生と予防，防除に関する理論と技術とを教育する。

林業經濟管理專業 (専科)：経済学の基礎的理論及び企画，組織，指導などの知識と技術を身につけ，主として林業の行政部門あるいは関連企業において経営と管理に携わる人材を教育することを目的とする。

經濟林專業：特用林産物の生産に関する基礎的な理論と技術を身につけた人材の養成を目的とする。卒業後は特用林産物の生産と教育，研究等の仕事を担当する。

園林專業：都市緑化，工場緑化，名勝旧跡の緑化等の仕事に従事する技術者の養成を目的とする。

林業機械專業：林業用機械ならびに木材加工用機械の設計，製造，利用，管理などの知識，技術を身につけた高級技術者の養成を目的とする。

伐木運材專業：森林の開発と集運材に関する知識，技術を身につけた高級技術者の養成を目的とする。

木材加工專業：木材の機械加工に関する知識，技術を身につけた高級技術者の養成を目的とする。

林産化工專業：林産化学に関する知識と技術，すなわちロジン，活性炭，香料，飼料，松根油，林産食品，天然色素等に関する知識と生産技術を身につけた技術者の養成を目的とする。

家具設計製造專業 (専科)：家具の設計製造に関する技術者の養成を目的とする。

数学專業 (専科)：主として南方林区における中学校の数学教師の養成を目的とする。

物理専業(専科)：主として南方林区の中学校の教師の養成を目的とする。

林業教育専業(専科)：林業職業中学校において林業という授業科目を担当する教師の養成を目的とする。

中南林学院の教育課程

系別	専業名称	修業年限	募集定員
林学	林学	4年	60
	森林保護	4年	30
	林業経済管理	2年(専科)	30
経済林	経済林	4年	60
	園林	4年	30
林業機械	林業機械	4年	30
	伐木運材	4年	30
林産工業	木材加工	4年	60
	林産化工	4年	30
	家具設計製造	2年(専科)	30
師範部	数学	2年(専科)	30
	物理	2年(専科)	30
	林業教育	2年(専科)	30

本科の修業年限は4年で卒業者には学士号が与えられる。専科の修業年限は2年である。また学院には修士号を授与する権限をもった11の科がおかれている。

学院には50の教研室(講座), 43の実験室, 4つの標本室がおかれ, 正副教授100人余, 講師200人余が配されている。学院にはまた, 1つの研究所と14の研究室が付置されていて, 国や省から委託された研究をおこなっている。さらに学院には林場(演習林), 苗圃, 標本園, 工場などの教育研究施設がおかれている。図書館には38万冊の図書と内外の学術雑誌1,700種以上が収蔵されている。」

到着した翌日の日曜日, 朝から私達は成子純教授に学内を案内してもらった。キャンパスは広大で約100ヘクタールあるという。丘陵地を削って造ったものらしく, 赤褐色の粘土地が全体を覆っている。移転後まだ日が浅く, 完全には整備されていないということであった。キャンパス内の造園も未完成で全面に植え込まれた各種の樹木もまだ十分には育っていない。正門を入れて広々としたなだらかな階段を上り詰めた正面に主楼と呼ばれる6階建ての大きな建物が聳え, その両側に研究棟が対称的に配置され, 主楼の後方キャンパスの中央と思われる辺りに出来上がったばかりの図書館が白く端正な姿をみせている。その近くに広大なグラウンドがあり, 図書館とグラウンドを挟むようにして, 西側に学生用の宿舎と食堂, 東側に教職員用の住居と食堂の建物が並んでいる。キャンパスの南東の端に小高い丘があって, 北側のゆるやかな斜面は樹木園で, 各種

の樹木が植えられており、麓の方は圃場になっている。丘の向こう側，南斜面には教職員住宅と幼稚園，小中学校，麓には高校が建てられている。さらに道路を隔てて商場があり，日用品はここで調えることができる。

中南林学院の学生数は2,000人近く，教職員の数は家族もいれると5,000人にも達するだろうという。合わせて7,000人近い人間が全てこのキャンパス内に住んでいるのである。ここは一つの独立した地域社会であり，教育機関から市場まで備えた大きな村でもある。従ってこの大学の管理運営は複雑で，学院長は，単に教育機関としての大学の運営だけにとどまらず，この地域社会全体を管理していくための，いわば村長的役割をも果たさねばならない。聞くところによると，全体の運営方針を協議する機関として教職員代表者会議がおかれており，その構成は教員代表60パーセント，一般職員代表30パーセント，事務職員代表10パーセントであって，定期的に会議を開いて大学の運営方針を協議し，その結果を学院長に伝える。学院長はそれを尊重するが，決定権は学院長にある。一方学生については，選出された学生代表が定期的に学院長と話し合っ，学生側の希望を伝える仕組みになっているという。

中南林学院での講義は5月11日(月)から始まった。内容は成長関数論が中心であった。聴講者は予想していた大学院生だけではなくて，18の省から集まったという技師や省立林学院の副教授といった人たちがむしろ中心であった。講義は通訳を介して行われた。最初の日は特に図書館の講堂で，学院長の出席のもとに，教官や一般学生も集まって行われ，日本における林業の現状と林業教育について話をした。

第二日目からは，林学楼4階の測樹学教研室の実習室で講義を行うことになった。教研室というのは日本の大学の講座に相当するものと思われる。中南林学院では森林経営学の外に測樹学が独立した教研室を形作っていた。成子純教授のもとに庄昌盛講師や王広興講師ら何人かのスタッフがいます。講義は午前8時30分から11時30分までであった。午後は，昼食後3時まで休み時間で，3時に再開，6時までが勤務時間となっていた。従って，私達にとっては，午後は全くの自由時間で，講義の準備をする外は午睡と散歩を楽しんだ。聴講生たちは，午後は毎日その日の講義に関して討論会を開いていた。私も一度だけ，一通り講義を終った最終日の午後，その討論会に参加を求められたが，成長関数を中心にして，成長量の測定方法や密度管理の問題にまで及び，互いに問題を提起しては意見を述べ合い，なかなか活発な雰囲気であった。現在，中国では各地で収穫表の調製が進められているということで，その手段としてリチャーズ成長関数に対する関心が高まっているように思われた。

講義は5月21日午前をもって終わった。正面の主楼をバックに一同で記念撮影をした。夕方7時から測樹学教研室主催の夕食会が教官食堂で開かれた。聴講生や教官のほか党の書記長も加わって賑やかであった。この料理はいつも豊富で旨かったが，この日の料理はまた格別だった。酒も色々だったが，皆余り飲まなかった。南の人は北に比べて余り酒を飲まないという。翌朝，聴講生のうち遠くから来ていた人たちが帰っていった。2週間毎日顔を合わせているとさすがに懐か

しく、互いに別れを惜しんだ。

翌日、測樹学教研室を中心とする研究状況などについて説明を受けた。

測樹器具：レラスコープ3種、ビッターリッヒのシュピーゲルレラスコープをまねてつくった中国製シュピーゲルレラスコープ、プリズムレラスコープ、棒の先端に錘りつきの回転スリットをつけたレラスコープ、この最後のものは簡単でよいアイデアだと思った。測高器2種、いずれもブルーメライスをまねたもの。ペンタプリズムキャリパー、アメリカ製の改良型で距離計としても使えるように設計されている。研究の状況：樹幹解析の誤差及びその修正方法の研究、これは成子純教授の最近の研究である。従来の樹幹解析の方法では各階級の樹高の推定に過大の誤差を生ずる。幹を2メートルに分断した後、各丸太を中心線を通して縦断し、縦断面について各階級の樹高を正確に求めた。それに基づいて従来法の補正方法を考えた。30年生の広葉杉176本を解析した、リチャーズ成長関数による広葉杉の成長法則の研究；リチャーズ成長関数による地位指数の研究、従来は平均曲線によっていたが、新しい方法ではリチャーズ成長関数を用いて地位指数のモデルを作成した。リチャーズ成長関数のパラメーターは地位指数と関係がある。中国では林木の樹型級を1級から5級に分けているが、地位指数は基準年齢における1級木と2級木との平均樹高によることにしており、広葉杉では基準年齢を20年としている；馬尾松の経営的研究、成子純教授は馬尾松の経営モデルの研究に関する5カ年計画(1986-1990)を担当し、年2万元の研究費をもらっている。いまリチャーズ成長関数を用いて成長モデルの研究を進めている。

中国の森林調査について成教授にきいてみた。中国では1975年以来、定期的に森林蓄積調査を実施している。チベットを除く全国の森林を対象として、8 km²に1個の割合で合計16万個の固定プロットを設け、5年毎に調査を行っている。1個のプロットの面積は東北地方では0.1 ha、その他の地方では0.06 haである。プロットの調査方法は毎木調査により、一変数材積表を用いてプロット材積をもとめる。樹高は標本木調査による。調査データは各省のコンピューターセンターに送られ、とりまとめられる。チベットの森林資源は航空写真で調査されている。西南地方(雲南省)は原生林の宝庫で樹木の種類も多く世界的に有名である。高さ70 mを超える巨木も多く、その蓄積は16億m³にのぼるといわれているそうである。

通訳の王章才君は誠実で明朗な素晴らしい若者だった。日本語は日本人と変わらぬほどに流暢で、つい日本の学生と話しているような気分誘い込まれるのであった。上海の名門、復旦大学で日本語を専攻し、現在林業部華東設計院に勤めている。私達の到着一ヶ月前に中南林学院に派遣されて、講義の原稿の翻訳や、専門用語の勉強をしながら私達を待っていてくれたという。私達が中南林学院で不自由なく過ごすことができたのも半分は彼のおかげである。私達は彼を通じていろいろ中国のことをきくことができた。

中国では大学の修学年限は日本と同じく4年であるが、この4年間に所定の科目全部に合格しなかった者は卒業を認められず、退学させられるという。年限の延長は一切認められないそうである。彼の同級生のある女性は、体操だけが不合格となったために卒業できず退学したが、その

ために就職してからの給料に大きな差ができた。彼女が体操に不合格となったのは、生まれつき身長が低く、しかも肥満しているために速く走ることが出来なかったからであるという。何とも理解に苦しむことである。

意外であったのは中国の兵役制度であった。中国には義務としての兵役はなく、軍隊に入るのは全て申告制であって、申告して合格すれば誰でも入ることができる、入りたくない者は申告しなければよい。また、一人息子はとらないという。それで軍隊が維持できるのかときくと、現在は入隊希望者が多いので問題はないが、将来人口増加が停滞して一人息子しかいなくなれば当然問題になるだろうということだった。

中南林学院のキャンパスの中でも、株洲の街角でも、「少生優育」のポスターがよく目についた。いうまでもなく産児制限、一人子政策の為のスローガンである。この政策の効果はかなり浸透しているらしい。一方、夫婦共働きの中国では、この一人子を両親や託児所に預けることが日常的に行われているらしい。祖父母に盲愛され、兄弟を持たず、わがままに育てられた一人子達によってつくられる将来の中国の社会には果して不安は感じられないのであろうか。それにもまして若齢層の人口が相対的に大きく低下することが予想されるなかで、国の活力は果して維持できるものであろうか。疑問に思えてならなかった。

中南林学院での生活はなかなか楽しかった。宿舎は教職員住宅のある一角、出来上がったばかりの招待所の二階で、眼下に広がる圃場をへだてて丘の斜面の樹木園を望む位置にあり、圃場の東側に連なる広い池の向こうの田園風景は朝に夕に私達の心を和ませてくれた。それは、今ではもう日本では失われてしまったものへの郷愁を満たしてくれたのかも知れない。

招待所の服務員の劉さんは人の良い素朴な感じの婦人であった。彼女は毎朝大きな魔法瓶2本に熱い湯を満たして運んでくれた。この湯は毎日の生活に欠かせないものだった。私達は中国風に湯呑の中へ直接茶の葉をいれ、魔法瓶の湯を注いで飲んだ。この中国茶の飲み方は上海からの列車の中で庄講師に教えてもらったものである。これが私達にとって殆ど唯一の飲物だった。中国の湯呑は機能的には日本の茶碗と急須とを兼ねたもので、一度茶の葉を入れておけばあとは湯を注ぎただけで結構何回も飲めた。余り強くなって長持ちのする中国茶にこれはふさわしい器であると思った。毎日重宝していたら、中南林学院を発つときに、庄講師が家伝の景德鎮の湯呑を記念に下さった。劉さんと妻はすぐに仲良しになった。もちろん言葉が通じないから筆談である。二人の間には共通の漢字というものがある。私が講義に行ったあと、彼女は部屋の掃除に上がってきてそのまま話し込んでいくことも間々あったらしい。いずれにしてもここでの生活は長閑であった。講義の外は何も考えなくても良い。午後は自由である。そして何よりも雑音が入ってこない。妻は私以上に伸びやかであった。文字通りの三食昼寝付きの生活を楽しんでた。料理の味は良く量は勿論十分だった。米飯は殆ど食べなかったが苦にならなかった。飲物はいつもビールだった。冷やしてなくて生温いビールだったが、これ以外に食卓に飲物は無かった。食事の時に茶は飲まないらしいと思った。

この季節、中国では夏時間であったから、日本との間では実質的に時差は無かった。毎朝6時になると丘の上のスピーカーから体操の音楽が流れる。5月16日の朝はいつもと違って体操のあと長々と放送を続けていた。王君にきくと、黒竜江省で大規模な山火事が発生し、今日で10日間燃え続けている、現在の消失面積は43万ha、材積70万m³、10億元の損害であるという。そのスケールの大きさもさることながら、これだけのニュースが10日間かかって東北から湖南までやっと届いたのかと思うとその悠長さに驚いた。着いて暫くのあいだは涼しかったが、次第に暑い日が多くなって、ときには30度を超えた。蒸し暑い日の後は決して夕立があった。ここは北緯28度、奄美大島とほぼ同じ緯度である。ここで発生した低気圧がやがて日本に移動する。湖南と日本は天候の上でもつながっている。とすれば、日本に先だってここにも梅雨があるのかも知れないと思った。

2. 長沙と韶山

5月16日、第1週の土曜日、成教授の案内で私達は聴講生の人たちとともに一日長沙に遊んだ。午前8時、2台のマイクロバスに分乗して出発する。「商場」の前には朝市が立っていた。豚肉の大きな塊をぶら下げているかとおもうと野菜や卵、洋服、ブラウス、シャツなどなんでも売っている。中南林学院の7,000人の人口は大きな市場なのであろう。バスはひっきりなしにクラクションを鳴らしながら自転車の流れを縫うようにして走る。両側の田圃は全て植え付けを終り、草取りが始められている。ミカン畑が現れる、赤茶けた小高い山の斜面に広葉杉が一面に植林されている。やがて自転車や人の往来がしだいに増えてきてバスは長沙に入る。中心街「五一路」にでる。湖南省人民政府の建物が見える。両側の街路樹は二列になっていて、内側はタイサンボク、外側はプラタナスの並木である。この並木は美しい。道路は二列の並木によって歩道、自転車道、車道に区画されている。タイサンボクの白い大きな花が開き始めていた。

9時、湖南省博物館に着き、馬王堆古墳の出土品を見る。1972年1月、市の東北5kmの畑の中の小高い丘から発掘された漢代の古墳で、筋肉に張りのある女性のミイラが発見されて有名になった。前194年、今から2,181年前、前漢の時代に長沙に封ぜられた利蒼とその家族の墓で、ミイラの主は利蒼夫人であるとされる。そのミイラと木棺と副葬品の全てがここに保存展示されている。ガイドの説明を王君が訳してくれる。彩色の帛画、絹織物、衣服、竹簡、琴瑟、笙などの楽器類、糲や蓮根などの食物類等が展示されている。帛画の図柄、彩色はよく保存されていて、とてもこれが2,000年前のものとは思われない。天国と現世、地獄を表したその図柄は興味深かった。天国の上の方には太陽と9個の星と月が描かれ、太陽には鳥、月には兎のシルエットが描かれている。地獄と現世との境には鬼がいて、下から現世を支えている。現世と天国との境には門があって、二人の門番が控えている。彼らの許しがなければ天国へは登れない。興味の尽きない物語りである。

中央の一室には女性のミイラが、透明のプラスチックのケースに収納され、半地下の床の上に

安置されている。それを上から見る事が出来る。顔の表情もはっきりと窺うことができる。手脚の筋肉の状態もよく見える。胴体は白布で覆われている。舌を少し出し、黄色味を帯びた顔はいくぶん苦しそうな表情をしている。かつらを被っていたらしく、生来の頭髪は黄色がかった黒で、それから判定された血液型はA型であったが、かつらはふさふさとした黒色で、判定された血液型はB型であった。解剖の結果、胃の内には果物や西瓜の種などがつまっており、いろいろな病気をもっていたという。死亡推定年齢は50才前後とされる。内臓は全てとり出され、完全な形のままで隣の室に展示されている。

地下の別室に馬王堆から出土した3個の巨大な木製の棺が置いてあり、それを周囲から見おろすように観察することができる。何れも形は長方形で殆ど完全な姿をしている。大小があり、一番大きな棺がミイラの発見された棺である。その大きさは、説明書きによると、長さ6.73 m、幅4.90 m、高さ2.85 m、板の厚さ0.4 m、使用された木材の量は52 m³にも上るといふ。樹種は広葉杉である。この時代にはこのような巨木が近くに沢山立っていたのであろう。それにしてもこの巨大な棺をどのようにして造り、どのようにして地下深く下ろしたのであろうか。かなり高度の技術と多くの人力とが用いられたにちがいない。棺の内部は二重構造になっていて、中央の広いところに遺体をおき、それを囲む40-50 cmの空間に副葬品をいれた。棺の周りには木炭の厚い層で埋められ、さらにその外側は二重三重に粘土で固められて、完全に外気から遮断されていたという。展示室の一角に発掘された馬王堆の模型がおいてある。三つの墓のうち、最初に死んだ利蒼の墓が一番小さく、つぎに死んだ息子の墓がそれに次ぎ、最後まで生き残った夫人のものが最大である。

昼食の後、岳麓山に向かう。長江の支流、湘江を渡る。川のなかに細長い中州があり、橘子洲という。幅140 m、長さは4.75 kmにおよぶ。長沙という地名はこの中州に由来するという。岳麓山は標高295 m、市内最高の景勝地で鬱蒼と茂った楓と楠の広葉樹林は見事である。毛沢東はここで思想結社・新民学会を結成、革命の想を練ったという。少し上ったところに愛晚亭がある。瀟洒な美しい建物である。正面にかかる「愛晚亭」なる額は毛沢東の書である。急坂を登って岳麓寺につく。門前に見事なラカンマキの古木が2本印象に残った。さらに登って蔡鍔の墓に着く。今世紀初頭の革命家で日本に留学、30才余りで死んでいる。そこから長い石段を上り詰めると、申亥革命の指導者、黄興の墓がある。長沙の出身である。湖南省は近代多くの革命家を生んでいる。その中心が長沙である。韶山に生まれた毛沢東が青年時代に学び、革命運動に入ったのも長沙であった。長沙はまた、今次の日中戦争においても主要な戦場の一つとなった。私達の記憶には、不幸な戦争の思い出と重なって長沙の名前が残っている。その地を今日このような形で訪ねることになろうとは思ってもみなかったことであつた。

翌日、私達は成教授の案内で韶山を訪れた。韶山は長沙の南100 kmに位置する寒村であるが、毛沢東の生地として知られている。同行は成教授、王君、私達の4人、早朝、大学の公用車、中国製の「上海」で出発する。例によって、自転車と人の錯綜するなかを、クラクションをならし

続けながら、フルスピードでとばす。今日は日曜日で郊外の自転車が特に多いという。湘潭に着く。かなり大きな街である。梧桐の並木の白い花が可憐である。11時頃韶山に入る。成教授はこの付近の出身であるが、もう故郷を離れて25年になるという。韶山賓館に着く。正面の右側に灰黒色の煉瓦造りの落ち着いた建物がみえる。入口に美しい草書で「故園」と書かれた額が掛かっている。毛沢東の筆であるという。かつては彼の別荘であつたらしいが、今はホテルの別館となっている。タイサンボクの庭木が印象に残った。昼食には早いというので、引き返して「滴水洞」の見学にむかう。入口付近は観光バスで混雑していた。一般の観光客はここで車を下りるが、私達はそのまま車の中に入ることを許された。「滴水洞」は毛沢東が別邸として建てたもので、引退後はここで過ごすことを望んでいたというが、滞在したのは僅か数十日に過ぎなかったという。灰黒色の煉瓦造りで重厚な建物である。内部に入ると、会議室、執務室、幾つかの寝室が廊下に面して並んでいる。裏山の山腹をくり抜いて頑強なシェルターが設けられている。非常の場合を想定してのことであろう。見学後、会議室で茶の接待にあづかる。

韶山賓館で昼食の後、毛沢東の生家を訪ねる。車をおりて緩やかな土道を暫く上ると、左手に大きな池があり、それに面して山懐に抱かれるように土壁造りの平屋が建っている。毛沢東の生家である。内に入ると、両親の寝室、彼の寝室、それに兄弟達の寝室が並んでいる。何れも土間に粗末な木製のベットを置いただけの質素な部屋である。かまどもそのまま保存されている。中庭に面して幾つかに仕切られた畜舎が残されている。牛や豚を飼っていたのであろう。かなり大きな農家であったことを窺うことができる。前の池は用水池であろうか。少年時代の毛沢東はよくこの池で泳いだという。池の反対側から見る、竹藪を背負った旧居のたたずまいはしっかりと落ち着いて美しい。付近に「南岸」と呼ばれる私塾の跡が保存されている。二階の薄暗い一室には、幾つかの粗末な木製の机が当時のまま残されていて、友人達と共に懸命に学んだであろう革命家の少年時代の姿が偲ばれた。

3. 張家界国家森林公园

中南林学院での予定の講義を終えた私達は、休養をかねて最後の一週間を張家界の森林公园で過ごすことになった。この森林公园は中国で最初に国家森林公园として指定されたもので、湖南省の西北部、長沙から420 kmの距離にあり、雄大怪偉な山岳景観と豊かな動植物資源をもって知られているという。株洲から車で10時間、早朝に発って夕方に着く予定であると聞かされたが、無理を避けて往路も復路も途中で一泊するように変更してもらった。そして往路の途中でポプラの試験林を見学することになった。

5月23日土曜日、快晴、気温は朝から30度近くに上る。8時、庄講師、王君と共に出発する。庄講師は張家界の近くの大庸の出身で地理に明るく、案内には適任であった。彼自身にとっては故郷に残した家族に会えるという期待もあったにちがいない。長沙を経て道を北西にとり漢寿に向かう。この辺りは洞庭湖の南にひらけた豊かな農業地帯で穀類、野菜、畜産物の宝庫であると

王君が説明する。午後1時漢寿县林業局に到着、人民政府招待所で豪華なスッポン料理の接待にあずかる。昼食後、付近のポプラ林をみる。中国林業科学研究院との連合試験林で82年に植栽されたものである。成長は頗る良好で、胸高直径は20cmを超えると思われた。伐期齢は12-15年で、用途はパルプ、マッチの軸木、合板等であるという。

3時頃漢寿县林業科学研究所へ着く。煉瓦造り、平屋建ての簡素な建物である。所長から概要の説明をうける。この研究所はポプラの研究では有名で、本場のイタリアからも視察団がやってきた程であるという。職員の数80人、面積は80ha程で、その中には約10haの水面を含んでいる。この水面はそのまま洞庭湖につながっており、この辺り一帯は湖岸の湿潤な沖積土からなる、かなり肥沃な土壌であろうと思われた。広い園内にはポプラの苗木の養成や成長試験が行われている。植栽列の間で菜種の栽培が行われているのが興味をひいた。ここでのポプラの成長は頗る良好で、年成長量は直径で7cm、高さで3-5mに達するとう。9年生で直径40cm、樹高30mもある木も見られた。一般に4年で収穫され、価格は最低でも150元/m³、普通200-250元/m³であるという。現在、林業と漁業に関する洞庭湖総合開発事業の一環として、地域農民と合板工場と研究所の合同によるポプラ林の造成事業が進められている。説明によると、面積1万畝(15畝=1ha)のポプラ林を造成し、4年後に伐採収穫する。造成にあたっては合板工場は苗木代を負担し、農民は労力を、研究所は技術を提供する。収穫量の内、1畝につき7m³を合板工場に提供し、残りを農民と研究所の間で8対2の割合で分収する。仮に収穫量15m³/畝=225m³・ha、価格200元/m³として試算するとこの計画による総収入は約3,000万元、日本円にして約12億円になる。肥沃な土地と早成樹種とを組み合わせた興味深い計画であると思われた。

研究所を辞去してその日の宿泊予定地、常德に向かう途中、道路の両側に展開する木材市場らしき光景が望見された。大小さまざまな丸太が幾筋にも山積みされ、その間のあちこちに長い足場丸太の様な木の束が立てかけられている。これらの木材はいったい何処から集められ、どの様にして取引されるのであろうか。常德の桃林賓館に一泊したのち、翌朝6時半に出発、慈利県の招待所で朝食をとり、一路張家界をめざす。珍しい光景に出くわす。道路の両側に、農民達が並んで思い思いに小麦の穂付きの藁たばを道一杯に広げて車の通るのを待っている。車に脱穀をさせようとする魂胆らしい。横着な話である。何キロにもわたってそれが続く。聞くとところによると、この辺りは稻二毛作、小麦一毛作で都合三毛作だそうである。今はちょうど小麦の収穫が終わり、一作目の稻の植え付けを済ませたところであろうか。小麦地帯が終わったところで、運転手は車をとめて車輪に巻き付いた麦藁をいちいち引きちぎって外さなければならなかった。

大庸に入って暫く、三叉路を右にとり張家界へ向けて少し走ったと思う頃、私達の「上海」は「ガッガッ」と突然大きな音を出してとまる。パンクだろうと思ったがそうではなかった。右後輪のサスペンションが外れてむきだしの路面につきささったのである。正午には張家界に着く予定が思わぬ故障となった。焼けるような暑さ、ほこりっぽい道端でズカケの並木の小さな日陰をたよりに、救援の車の到着をひたすら待つしかなかった。ようやく現れた救援車に乗り換え、

ら直線的に聳立して、その高さは200-300 mに達する。公園は全体として素晴らしい景観を誇っているが、中でも“黄石寨”の奇、“金鞭溪”の幽など、張家界の五絶と称せられる5つの風景区は最もすぐれている。群峰はそれぞれに形を変え、仙人の如く、妖怪の如く、獣の如く、あるいはまた鳥の如く、歩いているもの、止まっているもの、踊っているもの、飛んでいるもの、その形は正に千変万化で、生き生きとして躍動している。“金鞭溪”、“酔夢漢”、“南天柱”、“定海神針”、“夫妻岩”、“望郎峰”、“千里相会”など、その形によって色々の名前がつけられている。

植物の種類は豊富である。調査によれば、菊科、豆科、薔薇科、禾本科などの代表的な科の植物は張家界には全て存在している。木本植物だけでも93科、517種にのぼる。これはヨーロッパ全体の木本植物の種類2倍である。裸子植物、被子植物の何れも豊富である。カヤノキ、イチョウ、イチイ、メタセコイヤ等が見いだされる。松の種類も非常に多い。例えば黄山松、テーパーマツ、湿地松、台湾松、岩松等がある。被子植物の種類も多く、数十種にのぼる。張家界はまたクスノキ科の種類のもっとも多い所とされている。合わせて16種類もある。さらにまた張家界は百花園と称せられ、美しい花をもった植物も豊富多彩である。薬草の種類も多く合わせて500種以上に上る。その中には、珍しい種類が30余りも含まれている。例えば天麻、黄蓮、八角蓮、七葉一枝花、金銀花、五加皮などである。シイタケ、キクラゲなど菌類も豊富である。

張家界は天然の動物園でもある。調査によると、鳥類だけでも6目、13科、41種に上る。キジ、コジュケイ、キンケイチョウ、紅脚隼、白頸鴉、啄木鳥、画眉、相思鳥など。獣類も多く、イノシシ、イタチ、ジャコウジカ、キョン、タヌキ、ノロ、サル、水獺、穿山甲など多種に上る。

大庸は小さな土家族の町である。その外れに明代に建てられた“普光禪寺”という禪寺を訪れた。紅色の漆喰塀に囲まれた広い境内には、まず大門、二の門、三の門と続き、その奥の基壇の上に立派な仏殿がたっている。どの建物も中国風に何層にも反り返った屋根を持つ、極彩色に塗り上げられた美しい建物である。仏殿の中に一歩足を踏みいれて驚いた。中には何も無いのである。庄講師の説明によると、以前はここに普賢菩薩をはじめ何体かの立派な仏像が安置されていたが、文化大革命のときに紅衛兵達によって破壊されてしまったのだという。当時中学生であった庄講師はその破壊されていく光景をじっと眺めていたという。建物も勿論破壊された。完全に破壊されたものもあれば、部分的に破壊されたものもある。文革が去って、ようやく現在の姿にまで修復されたのだという。今もなお修復や再建の作業が続けられている。南京にも同じ名前の寺があったが、こちらは文革によって完全に破壊し尽くされてしまったという。文化大革命、それは中国の現代史のなかでまさに悪夢のような時代であったと感じざるをえなかった。私にとって思わぬ発見もあった。この寺の建物は全て木造であるということである。丸い柱はいうまでもなく、梁や桁にいたるまで全て木造であるという。表面が極彩色に塗られているから気づかずに見過ごしてしまうことが多いが、いわれてみればそのとおりである。なによりの証拠に境内の一角で再建に使う丸い柱を加工しているのを見かけたのである。樹種は必ずしも一定していないようで、私のみたのは馬尾松であった。後日のことになるが、北京の天壇公園にある祈念殿の壮大

大きな峠を一つこえて張家界森林公園の入口にたどり着いたのは3時半頃であった。張家界賓館にはいる。正面に管理棟があり、その裏の広い敷地に二階建ての宿泊棟がコの字型に配置されている。中庭に立つと、薄く植生のヴェールを被った暗褐色の岩峰が管理棟の屋根越しにのしかかるように迫ってきた。夜半、激しい雷雨が襲った。

翌朝、曇ってはいたが天気は回復の兆ありと思われた。王君の勧めにしたがい、園内に入ることにする。彼によると、この森林公園の探訪ルートには、険しいが展望の良い黃石寨風景区と溪流沿いに下る金鞭溪風景区の二つがある、前者は往復約10 km、後者は約17 km あるが平坦であるという。天気の具合いと体調とを考え、後者を選ぶ。

ホテルを出て金鞭溪に沿って下る。公園の入口のゲートで入園の許可をうける。道は石を敷き詰めてよく整備されていて歩きやすい。峡谷を挟んでその兩岸に暗褐色の岩峰が鋭い断面をみせ、さまざまに形を変え、所をかえてそびえたっている。岩肌には頂上に至るまで、疎らに植生が生えている。成教授の言を借りるとこの「頭に毛のあるところが張家界の値打ち」であって、桂林などとはひと味ちがうところであるという。雄大な景観に見とれながら進むうち、かすかに雷鳴が轟き始め、群峰のあいだに霧が低く下りてきてその動きが次第に速くなる。時折雲の切れ目からさしこむ光に照らし出されて、激しく去来する霧のあいだから見えかくれする群峰の姿は例えようもなく美しく、夢幻の仙境にあるような気分に誘われる。雷鳴が急に近くなり、薄暗くなった空から大つぶの雨が落ち始める、と見る間にはい然たる豪雨となる。やむなく道端の木立の陰に立ったまま、折り畳み傘の下に身をちぢめておおよそ30分を過ごす。まだほんの入口であるが、これ以上進むのを諦め、小降りになるのをまってホテルに引き返す。正午前であった。

雨は翌日になっても降りやまず、張家界の観光は断念して、車を雇って大庸に下る。十分な探訪の機会を逸した張家界国家森林公园の概況を、王君に訳してもらった同公園の説明資料によって、簡単に紹介しておこう。

「張家界森林公園は中国最初の森林公園であって、湖南省の西北部、東経110度28分、北緯29度08分に位置している。長沙から西北西420 km、大庸から32 kmの距離にある。面積は13,300 ha、海拔高は420-1,234 m、年平均気温16-17度C、年降水量1,200-1,600 mmである。公園は奇峰林立する雄大怪異な山岳景観と、豊かな動植物資源を特徴とする。最近になって国家森林公园に指定され、一般に公開されるに至った。

地質は水性岩に属し、ほとんどは赤色の石英砂岩であるが、一部に僅かではあるが石灰岩も存在する。地貌は砂岩峰林、峡谷地貌に属し、2,000余の奇峰が林立している。峰林の下には深くて狭い谷間がある。土壌は砂質の中層土壌に属し、麓の方は土層が深くて植生が茂っているが、上部は土層が浅くて石が多い。しかし森林が多いので水土の流失は割合に少ない。

張家界の景観には色々な特徴があり、開放されたばかりであるが、もう既に世界中に広く知られたり、国の内外から観光客が訪れるようになった。“人間世界の仙境”、“天下の奇観”、“緑の宮殿”、“世界一流の風致”、“天下第一の奇山”などと評されている。林立する奇峰の殆どは平地か

な建物も完全な木造で内部の華麗な天井も全て一本の釘も使わない木組みであると聞かされて驚いたものである。

再び株洲に戻った私達は、31日北京へ発つまでの2日間をなお中南林学院で過ごした。29日は株洲に出かけ、石峰公園に登った。小高い山の公園で人工的に植栽したと思われる若い広葉樹に覆われていた。中国ではいま全国的に緑化事業が進められているようであるがこれもその一端かも知れない。頂上からの眺望は素晴らしく、北上する湘江の流れがこの山を避けるかのよう一旦西へそれ、そして再び北へと大きく湾曲し、その懐に抱かれるようにして広がっている株洲の街の様子が一望された。滞在中私は一度も森林らしい森林を見たことがなかった。原生林も経営林も、中南林学院の演習林さえも見ることなしに終った。しかし株洲の近くにはそんな森林があるとは見えなかった。おそらく簡単には行けない辺りな所でしか残っていないに違いない。もしまた機会があれば今度は森林を訪ねてみたいものと思った。

外国との学術交流について、中南林学院では、現在のところ、日本、アメリカ、オーストラリアとの交流にとどまっているが、将来は西ドイツ、フランスとの交流を進める計画であるという。日本の大学との交流もますます盛んにしたいと望んでいた。具体的な方法として成教授は、いま中国でやっているように、往復の旅費を負担すれば、滞在の費用は日本側で負担するというような制度が日本にはないのか、と聞いておられた。制度はあっても予算に枠があってなかなか希望通りにはいかない現状を説明するしか仕方がなかった。

最後の夜は成教授夫妻に招待され、庄講師、王君と共に夕食をご馳走になった。心のこもった素晴らしい家庭料理であった。端午の節句を二日ばかり先取りして庄講師手づくりの粽もそえられた。当地の粽はもち米またはもち米に小豆や豚肉をいれたものを竹の皮に平たく三角形に包み、棕櫚の葉の繊維で縛って蒸したものである。日本のちまきはこの中国の粽が照葉樹林帯に沿ってやってきて、さまざまな形で各地に定着したのかもしれないという話しになった。中国では6月1日が端午の節句であるが、これは農曆の5月5日にあたる、曆には公曆と農曆とがあるが、農民の慣習的な行事は農曆で行われているという。楽しく、心温まるひとときであった。

午後八時半、王君が任地へ帰っていった。招待所の入口で見送る。名残は尽きない。よい通訳であった。折から正門横の野外ステージでは湖南省内の各大学の大学院生による合同音楽祭が賑やかに行われていた。